d Society

編集後記

コロナ禍での二度目の紀要ができあがった。掲載するものがなくては刊行できないのであるから、とにかく中身が揃ってよかったというのが率直な感想である。

その中身だが、投稿論文22本中、査読の結果掲載されたものが12本。いろいろな考えがあろうが、国内外をとわず資料調査やフィールドワークなどが以前ほどには簡単にできないなか、ある程度の数になったことはよろこばしく、投稿者の努力に敬意を表したい。

とはいえ、コロナ禍で成果を出しにくい分野も依然として存在する。どんな状況にあっても、ねばりづよく、そして焦ることなく柔軟に研究をつづけていくことが大切である、とえらそうにいっておく。

また、二度目の編集長であった。11年前には想像もつかなかったが、原稿や査読、ゲラのやりとりがすべて電子化され、ほぼパソコンでの作業でおわった。テレワークである。時代のながれになんとかついていけていた前回とはことなり、落伍感をひしひしと味わった一年であった。ほぼ人と会うことなく作業ができてしまうのは、よしあしであろうが、そうしたなかであるからこそ、紙媒体の手ざわりを、いましばらく強調してもよいのではないかと思う。

こんなたそがれ編集長でもなんとかつとまったのは、編集委員の方々をはじめ、教員投稿、特集に寄稿をしてくださった方々、査読をこころよくひきうけてくださった方々、編集、制作、会計事務などをおこなってくださった方々すべてのおかげである。こころから感謝もうしあげる。そして、やむなく途中で交代したが、テレワークに欠かせなかった、10年近く使いこんだノートパソコンも、この場をかりてねぎらってやりたい。

安田敏朗

（『言語社会』16号編集長／言語社会研究科教授）